

特集 「震災から見えてくる未来」

『いのちの泉は自分の足もとにある』

岡野玲子

1982年漫画家デビュー。『ファンシイダンス』で34回小学館漫画賞。『陰陽師』で第5回手塚治虫文化賞マンガ大賞受賞。他の著書に『妖魅変成夜話』『イナナナ』などがある。また現在、『陰陽師 玉手匣』を「メロディ」（偶数月28日発売）で連載中。

昨年4月に東京自由大学主催で

「シャーマニズムの未来―見えな
いモノの声を聴くワザ」と題され
たシンポジウムが開かれました。

パネリストのおひとり岡野玲子さ
んが、津波で壊滅的な被害を受け
た宮城県雄勝町に伝わる法印神楽
の一つの物語を紹介されました。

「橋引」と題された演目は、自然と
人間の魂の交流を描き、私たちの
生き方に大きな示唆を与えてくれ
るような気がします。震災後一年
が経ったいま、私たちがどう生き
ればいいのか、改めて岡野さん
にお話をうかがいました。

自然への敬意を取り戻す

「シャーマニズムの未来」では、

原発の話も外せませんでした。「見

えないモノの声を聴くワザ」という、
副題がついていたので、きっと原発
の話になるだろうと思って、ある本

を持って行きました。『自然は脈動
する』（アリック・バーソロミュー

著）です。自然との調和を考える技
術者がこの本を読んだら示唆される
ことが、とても多いと思います。ヴ

ィクトル・シャウベルガー（一八八五
〜一九五八年）という研究者のことに
ついて書かれているのですが、彼は

オーストリアの森林監視員の家に生
まれて、小さい頃から自然を観察し
ていました。マスが滝を昇るのをじ

っと観察して、マスは自力だけでな
く、温度など条件が合った時に滝の
中に逆流するチューブのようなところ

ろができて、そこに乗った瞬間に浮

揚性の流れに乗ってヒューっと滝を
昇ることを彼はつきとめたんです。

そうして彼は流動する水の螺旋運動
からエネルギーを得る研究をされた
方なんです。というとき浅く見られ

ちですが、彼は早くから現代科学が
自己中心的に支配しようとする傾向
があることと、ものごとを表層的に

しか見ていないことを知っていました。
そして核分裂の、外に向かって
放たれる熱いエネルギーとは真逆

の、水を使った内側に向かっていく
静かな（たぶん生きている）エネルギ
ーを得ることをシャウベルガーは探

求していたそうなのです。この本
は、自然から得られる、密度の高い
高次の智慧の示唆に満ち溢れてい

て、彼のような方法を求めている人
々には前に進む力を与えてくれると
思うのです。

私がこの本に同調するところは、西
洋の科学者たちがシャウベルガーを
まったく受け入れなかった彼の思想

の部分なのですが、彼は人間は自然
への敬意を失って生きることができ
ないという考えを持っています、自然

に身を任せることで、自然の知性と

つながり、その知性から自然自らの
健全性、調和を保つための智慧を聞

き出せることを知って行動されてい
たところなんです。例えば私たちは
食物を摂取するわけですけども、

田植えや、種を撒く前などの土地や、
収穫物に対する祭祀、祝福などを
行うことによって、何もしなかった収

穫物よりも作物の振動数が上がって
いるんだということを彼はちゃんと
言ってるんですね。古代にまで遡る

ことのできる社会ではそのような儀
式や祝福が続いていると。それらの
儀式によって収穫物の質が上がり、

摂取する人間も人間の細胞にも大き
な恩恵が得られることを、古代社会
は知っていたと。

かつて日本も神様に捧げる御神饌
を作るときに、歌をうたいながらつ
くっていたところがあります。そう

いうことが神事の中に残ってはい
るものの、今は効率的な量であるとか
速さであるとかに価値観を奪われて

しまつて、祭祀の儀式が、祈りや感
謝だけでなくその物質が持っている
以上のエネルギーを生み出し受け取

る方法であつたということを忘れて

しまっています。私自身も実生活の中の体験から、その違いは解ります。それをやはり広く取り戻していく必要があると思うのです。

シャウベルガーの思想をまったく受け入れなかった西洋的な考え方は、自然と人間を必ず二元性で対立させるんですけれども、古代の東洋は、シャウベルガーと同じように、自然の中に身を置き一体になり、自然と同じ方向を見て、ひゅつと自分の中に入ってきたその自然から、示唆を得るんですね。五行大義などを読むと、それがよくわかるんです。東洋は一元性なんです。自然があつてその一部として自分が存在し、自分の中に自然がある。常にそこには神秘的な繋がりがあり、言葉だけではない全身全霊の濃密な会話や関係がある。

そのやり取りこそが「いのち」だと思ふんですね。私たちもすべての器官をアンテナにして、自然や宇宙また自分の中の声に耳を傾けて、同調して、一緒にひとつの生命体のようになつて生きていくと、地球と、宇宙と響き合つて生きていることが

煌めくように実感できると思うのです。

原発のなかで

小さな男の子が泣いている

原発の話に戻りますが、脱原発というのはよくわかります。ただ、建設を皆で止めることができず、原子力を研究する施設や原発が出来てしまったのも事実なんですね。私が思うには、原発とても、自然の許しがないければ形にはならなかったのではないかと思うんです。そうでなければ、途中で崩壊していて物質にはならなかったはずと。でも、出来上がつてエネルギーを供給している以上、宇宙のなかで、それは認められた存在であつたと思うのね。そしてそこには「御魂」があるとも思っているんです。

日本はもともと自分たちに危害を与えるもの、目に見えない恐ろしいものなどに対して祈りを捧げ、怒りを鎮める鎮魂の祭りをし、良いところを誉め讃え、逆に護り手になつてもらえるようにお祭りをする

得意とした国だと思うのですね。

また、日本の中世時代には、器物に霊が宿るとして、それを「九十九神」と呼んでいましたし、長く使用したものを供養する信仰もあります。

そして一昨年前には、遠く宇宙を旅して、傷つきながら健気にも地球に帰つて来た小惑星探査機があります。彼は日本中の人々から無事の帰還を祈られ一条の光りになつて燃え尽きた姿を皆が見ていました。

東日本大震災が起こり、福島第一原発が制御不能に陥り建家が爆発したとき、ただならない、圧力のような危機感と悲鳴のようなものを感じました。

その頃、きつと多くの方々が様々なかたちで祈りを捧げていたと思いますが、そのとき原発に御礼を言わなくて、という強い思いに突き動かされました。そして、身を清め、東西南北と天上と地球を拝し、制御しがたいエネルギーに対して、離れた地ではあるもののある種の覚悟を決め、エネルギーの恩恵を受けて来たことに御礼をいい、そのエネルギーを使うだけ使いながら、制御できな

くなつたとたん存在を拒否する私たちの失礼を心からお詫びしたの。どうか許して下さい、って。そして懸命なその抑制にも、お祈りしたんですね。

そのとき原発は冷却水が必要でした。消防士たちが命懸けで水をかけに福島に向かいましたが、私は女性として、何かお手伝いできることをと、目に見える水だけではなく、私が汲むことのできる目に見えない水を送ろうと、お祈りしました。そこには文字通り焦燥が感じられて、私は老齡な原発が怒っているのだと思つていたんですが、乾いた靄の中に見えたのはもう本当に泣いている少年の姿でした。原発の御魂はまだ若かつたんです。本当に驚きました。それで「どうして？」って言うんですよ。そういうふうに関こえるのね。「どうして？ どうしてなの？ 僕は、求められたからそのエネルギーを出し続けた。自分でも止めたいけど止められない。なのにどうして皆で嫌うの。僕は求められたからそのエネルギーを出し続けただけなのに。」って。

彼は何ひとつ報酬をもらっていないですよ。彼は、供給に依えてエネルギーを出し続けただけで、それは、ただただ彼の愛だったんです。純粋なんです。それが伝わって来て、本当にその愛に対して申し訳なかったと思いました。その時は一人のようだったので、今までその愛を受けたものとして、それを請け負う一人として、「私でよければ」って呼んだんですね。で、その引き受けた瞬間に自分の心臓がパキーンと割れるのね。

日本列島の姿をひとつの龍体として見たとき、福島第一原発の場所って心臓の位置に見えるんですよ。それに、あの原発の形状そのものを見ても、心臓にすごく似てるのね。ポンプ状になって循環してそこからエネルギーを出しているわけじゃないですか。そのエネルギーが愛というのも深いものを感じるんです。その心臓が壊れて泣いている。そして、靄の中央のエネルギーの光がセルリアンブルーに見えたんです。この光に関係してる女神っていうのは白山姫さんだと思って、次の

日、白山神社へ駆け込み、ただただ鎮魂を祈りました。見ると、そこに三月の「生命の言葉」という短冊の印刷物が置かれていて。愕然としました。

『己(おのれ)の立てるところを深く掘れ そこに必ず泉あらむ』

高山樗牛の言葉なんです。

みんながいのちの水を

汲み上げる時代

私は『陰陽師』の本を描きながらずっと地湧社さんの設立趣旨と同じようなことを考えてたの。『陰陽師』の12巻で伊勢神宮と大嘗祭について描いたんですけれども、その時に、悠紀と主基の建物の中で執り行われる、天皇と采女(うねめ・ルビ)による、国を豊穰にするための呪的(じゆてき・ルビ)な儀式を調べている時にね、この儀式には井戸が必要なを感じてくるのね。そして采女は霊的に、ずーっと自分の奥を掘っていく巫女なんだということが解って

くるのね。掘っていくと、そこに太古の泉があるんです。

その泉は、地球がどんなに変わっても枯れることはなく、私たちが知っている水と違って、濃密なんです。

でも、実際汲み上げると霧のようなイメージなのね。その水を汲み上げることによって、今このように荒れてしまった土地をいくらでも豊穰の土地に戻すことが可能なを感じるんですね。それを自分のハートチャクラから汲み上げることによって。

それを汲み上げることが自分自身の限らない豊かさを取り戻すことでもあるし、普遍的に宇宙への、自然への献身のように感じるんです。

シャウベルガーの考え方が、一九〇〇年代の始め西洋科学ではまったく受け入れられなかったのは、謙虚な心で自然に対することで、自然と調和する智慧や技術を自然自身から授けられるという、脳よりもハートを使った技が科学として認められなかったからだと思うのです。

東日本大震災は、地震情報の地図を見ても、原発の事故を見ても、甚

大な被害を鑑みても心臓や心への関わりを感じてしまいます。その心臓は、日本人一人一人の心臓でもあるし、日本という国そのものの心でもあるように思う。

私たちがそれぞれの泉を掘り当てて汲み上げることに成功したなら、私たちはもっと自然の言葉に近づいて、調和のうちに生きる未来にも近づけるように思うのです。

未来に向かうと、きっと原発は必要なくなるのだと思います。でもその前に、私たち一人一人の心の中で、原発への鎮魂の儀式が必要な気がします。

その敬意をはらうことは、次なる技術への橋渡しでもあるし、汚染されてしまった自然の健康を少しでも早く取り戻す智慧をもたらし、バラバラになった家族や地域の繋がりを、また一つに繋げる術の一つのようにも思います。

それらは、一人が達成したら、次々と自然に伝播して行く。そのような智慧に目覚める時が来ているような気がします。